

ごめんなさい、川野さん。
ごめんなさい、奥さん

「もう身体がついていきませ
ん」

1か月ほどたつて奥さんから電話がありました。お風呂はデイサービスで入れるようになり、奥さんもデイサービスに行く時のご主人の着替えを準備をするのが楽しみになっておられました。

そんな中、違う困りごとが出てきました。川野さんは夕方の散歩が日課でした。しかし、夕方、散歩に行つて一人で帰つてこられなくなることが多くなってきました。奥さんが心配になりました。奥さんが見つける時は良かったのですが、どこを探しても見つからず近所の人にも頼まなければならぬ日もできました。

老人保健施設の ショートステイへ

それから間もなく、奥さんがとうとう体調を崩され、近所の老人保健施設のショートステイを利用することになりました。すると、あれだけ歌や踊りが大好きだった川野さんが全く歌わな

認知症の人が 最期まで「生ききる」暮らしの支え方 +2+

川野さん(仮名) ごめんなさい 2

お風呂に入ってくれなかった川野さんですが、ドライブをきっかけに、入ってくれるようになりました。しかし…。

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

くなつたのです。声も出なくなり
ました。笑顔もなくなりました。
僕達が夕方会いに行けば、とても
小さな声で「戻いが、戻いが」と
うつぶきながら繰り返し返すばかり
でした。

し、川野さん以外に50人近くの
お年寄りがいらつしやる中で、限
界もあつたのでしょうか。今思え
ば川野さんにとっては初めての
場所であり、知らない人ばかり。
歌を唄つても喜んで手拍子をし
てくれる人もいません。不安で仕
方なかつたのかもしれない。寂
しかったのかもしれない。
「このままではお父さんがダ
メになつてしまう」

奥さんの体調はまだ完全
には戻っていませんでしたが、予
定の2週間を1週間で切り上
げ、自宅に戻られたのです。



自宅に戻った川野さん

僕達は自宅に川野さんが帰る
ことができて、また元気を取り戻
してくれると喜んでいましたが、
全くそのようにはなりませんで
した。自宅に戻られた川野さん
は、これまでになかつた便いじり
や便失禁が頻回に起こるよう
になりました。奥さんの介護負担
もピークに達していました。僕
達は、「何かできることはない
か? 奥さんが休む時間を作
りたい」と思い、役場に「川野さん
にデイサービスを週1回ではな
く、2回もしくは3回使つても
らえるようにしたい。時間も夕
方遅くまで利用してもらいたい」

認知症の人が最期まで「生ききる」暮らしの支え方

●川野さんとの出会い



と許可を貰いにいきましたが、却下されました。役場の担当者の方も検討をしてくださいでしたが、「他にもデイサービスに行きたい人が待っている。公費でやっているのだから一人だけ特別扱いはできない」というのが許可できない理由でした。

僕は悩みました。役場は許可しないけどこのままでは奥さんがまた倒れてしまうと、現場の指導に反して週2回利用してもらおうにしました。しかし、



これはその場しのぎの対応にすぎず、奥さんはまた体調を崩されてしまったのです。そして、前回、老人保健施設で川野さんの状態が悪くなったので、今度は町内の特別養護老人ホームのショートステイを利用することになりました。期間は決めていません。それから1週間ぐら経つたでしょうか、奥さんからまた連絡が入りました。

「園を飛び出して近くの川沿いで転んで怪我をしていたそうです」。

僕は、すぐに奥さんのところに駆けつけ、経過を改めてお聞きし、「もう一度、川野さんに帰ってきてもらいましょう」と言いました。しかし、奥さんはすっかり疲れ切った表情で「もう限界です。家には連れて帰れません。お父さんとは一緒に居たいけど、これ以上たくさんの人達に迷

惑をかけられません」と涙を浮かべながらおっしゃられました。

そして、
特別養護老人ホームへ

それから間もなく、自宅から1時間ほど離れた町外の特別養護老人ホームに川野さんは入所されました。町内の施設は待機者がたくさんおられ、すぐに入所できないという理由で、遠い場所になってしまったのです。当然、川野さんにとっては知らない人ばかり。歌うこともなくなり、言葉も出なくなり、歩くこともできなくなりました。入所されて1か月、川野さんは亡くなりました。

川野さんと出会って10か月目の出来事でした。僕は何もできなかつたのです。川野さんに対して、奥さんに対して、「ごめんなさい」という言葉しか出てきません。川野さんはもつと楽しく過ごしたかった。奥さんも川野さんともつと一緒に居たかった。でも僕はその願いを叶えることはできませんでした。介護の仕事について初めて味

わつた大ショックです。自分の力のなさを痛感した出来事でした。

ありがとう！川野さん

川野さんが亡くなられてから2か月後、平成8年5月、理事長の理解を得て宅老所を始めました。川野さんと過ごした10か月。生き様を通して教えてくださったこと、同じ失敗を繰り返したらいけないと、福岡の宅老所よりあいを見学に行き、理事長の知人の空き家をお借りしました。大集団ではなく、認知症の方とじっくり、ゆつくりかわりたい。普通の暮らしを継続できる環境を作りたい、そんな思いで始めました。本人、家族の思いにその都度、きちんと向き合い、一緒に喜んだり、時には一緒に悩んだりしながらお付き合いしていく、そのプロセスの大切さを教えてくださったのが、僕が初めて出会った認知症の川野さんです。今の僕の介護の仕事はこの出来事がスタートです。

川野さん、ありがとうごさいました。絶対にあなたのことは忘れません。

川野さん、ありがとうごさいました。絶対にあなたのことは忘れません。